

今月の漫画

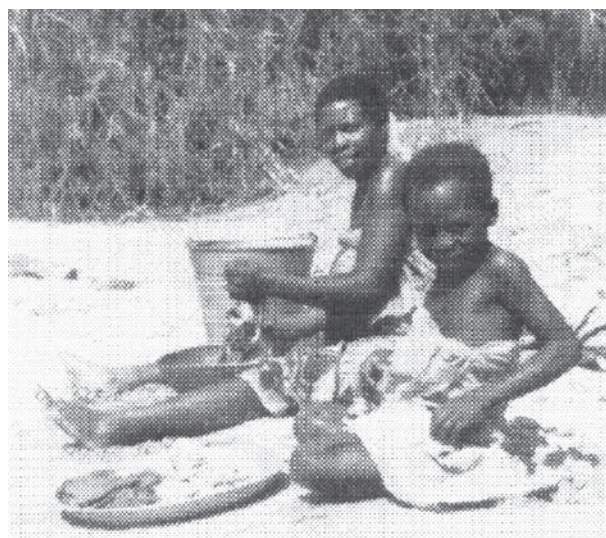
古山恵一郎

工務店の若旦那にいきつけの飲み屋に連れていかれた。ヲジサン二人はヴェトナム戦争の頃のノーテンキな「フォークソング」をカラオケでどなる。こうしたところには西岡たかとか高田渡のウタは無いのだ。せいぜいが遠藤賢司の「カレーライス」くらいだ。我々の時代に始まった巨大なモラトリアムを照射したこのウタはそうは受け取られず、単なる同棲生活のBGMとなってしまった。20歳からそう遠くなさそうな娘二人がアルバイトをしているのだが、そいつらが顔を見合わせて「あれ、やろっか」と言って始めたのが「マイッカ」というウタであった。かなりのアップテンポでラップ風の掛け合いになっているウタを、こいつらは完全にそらんじていたのであった。遠藤賢司の「カレーライス」の時代には割腹自殺と背中合わせになっていたモラトリアムは、彼等にとっては生まれながらのもので、その裏側には本当にナニモノイのであるらしかった。生身の人間であろうに、商品が詰まったショッピングバッグの如きノーミソ提げて生きていかなければならないなんて、と、アルバイトのバカ娘があまりに不憫で、気が着くと眼から涙が出ていた。「あれーッ、おじさんどうしちゃったのーッ」「よっぱらいってやだよねーッ」「だよねーッ」

恥ずかしいことに、自宅に帰っても事態は変わらない。バカ息子のうち二人は高校3年と中学3年であるのだが、親が受験をバカにしているタタリで、バカ受験生である。受験自体が進学塾などを通じて完全に商品化されており、子供達は「どの講習を買おうかな。」と仲間内でショッピングを楽

しんでいるようなのだが、親はそれを認めたがらない。かといってそれに代わるものを提供できないでいる。その中学3年生が親に隠れて弟と読んでいた漫画に「稲中卓球部」というのがあった。「貸本漫画」風のグロテスクな画からして、我々の時代の少年漫画とはかけ離れたものなのだが、けっこう彼等の生活感覚からは違和感のないものであるらしい。「1984」といった管理社会への恐怖が近代の自我を起点にしているのに対し、「稲中卓球部」にはそうした自我さえ殆ど見られない。あるのはただお互いの上下関係のみなのだ。我が息子どもがそうした世界に生きていると思うとあまりに不憫で、情けない。

(こやまけいいちろう / ASK Inc. / 浜松)



危険な関係

永田温子

にわとりを殺して食べました。羽むしりのために熱いお湯を沸かしたり、とり鍋のために畑の野菜の下ごしらえをしている間に、本当に手際よく、Oさんがとり小屋にそっと入って、とりを連れ出し、頸動脈を切り、放血してくれました。心配りの彼女が言った、「永田さんが見ていないところで・・・」というわけにはいきませんでした。その後の食卓で、見た見ないは、私にはほとんど関係ありませんでした。何年も前に豚を飼って、同じように食べたときはなぜか違っていました。解剖の結果、2羽は異常なし、1羽は白血病、1羽は脂肪肝との診断でしたので、卵を生まなくなっていたことも合わせると、食べごろだったと思いました。又、病名を聞いて、飼っていたころの、私流のズサンなエサのやり方などを反省したりもしました。閉じ込めて飼う以上、飼う人が命を握るわけですから。

その日、多くの人たちの胃袋に「うまい！」と収まった後も、スープストックなどとして、ずっとにわとりは姿を変えて私たちのそばにいます。その後も我々の血肉となって身体にとどまるわけですね。

これで残る鳥は七面鳥3羽となりましたが、卵はちっとも生んでくれません。”番鳥”のように、玄関近くに住んでいるおんどりは、「なな一」と呼びかけると、ずっとこっちを向いて、まーるい目をして耳を傾けているのです。来る人たちは、「クリスマスに食べるんでしょう？」と言っています。山の夏には・・・こんなこともありました。

「8月6日午後10時ごろ。私はベッドの上でゲームボーイをしていた。数分して私の足の親指に激痛が走ったのね。何事かと思い足元を見ても何もいない。私はとっさに思った。

『ズズメバチだな。』

僕の家での生活はまさにサバイバル。ズズメバチが家の中にいるなんて日常茶飯事なのさ。痛かったけど最初はなんとも思っていなかったのさ。しかし数分すると、おでこにぶつぶつが出始め、皮膚が固まってきた。頭の中もボーッとしてきた。やばいと思った私はすぐに病院に行き、点滴を打ったのね。ステロイドさ。ドクターの話によると、「ズズメバチにさされたためのショックによるものでしょう」ということだ。点滴打ってる間に花畑を見たさ。これは一種の臨死体験と思われる。しかしズズメバチ一匹に私のパワフルな体が死ぬわけがないのね。翌日、講習会に元気に行ったのさ。(おわり) 永田 壘

たとえば、ある日突然にわとりを食べるためには、それまで手厚く飼うとか、畑に種まきに出て、一匹のズズメバチが帰れ帰れとつきまえば、それに従うとか、刺されればあわてないで人間の手だてをとるとか、山でのくらしには、身体や気持ちの上でのあるバランス感覚が必要のようです。受ける-返す、出る-引く、緊張する-緩めるといったような。格好良くいえば、身体をはってまわりの自然との折り合いのつけ方を学んでいっている毎日といえるでしょう。

(ながたはるこ/小別沢・山羊2クラブ/札幌)

■トンネル山で収穫できた素材を無駄なく生かそうと、下のような日程で手仕事をしているはず。作ってみたい方はご連絡下さい。どの日も10時ごろからを予定。

1、フェルト帽子作り

9/23、24(土、日)、9/30、10/1(土、日)

2、ハム、ベーコン作り

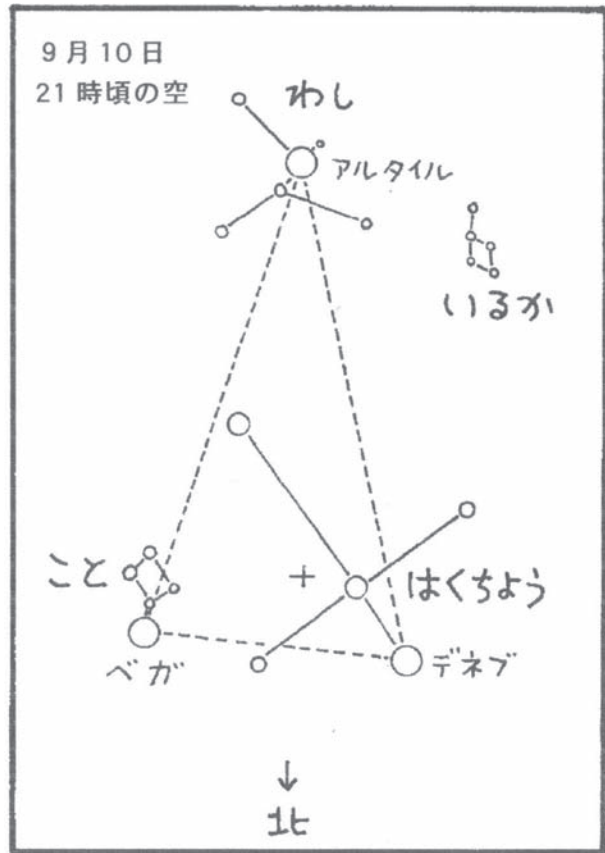
10/14(土)、10/21(土)、10/28(土)

3、ハーブろうそく作り

星座のたしなみ 7

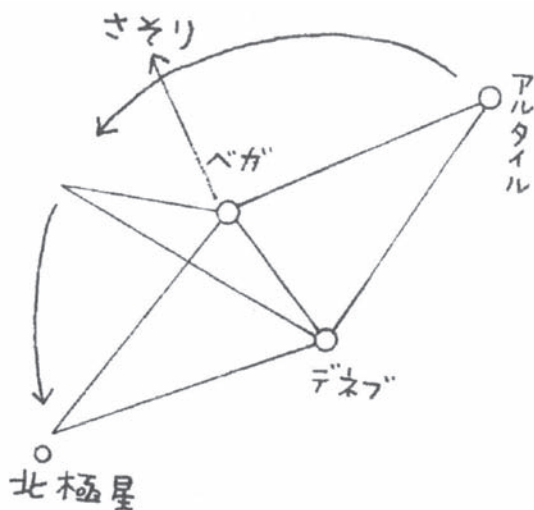
森雅之

わし・こと・はくちょう・いるか



「次回からは夏の星座を」なんて前回書いたのですが、もう9月。で、大急ぎで夏の名残の星座を。8月9月、空を見上げると3つの明るい星が三角形をつくっています。これが「夏の大三角」。「冬の大三角」同様、大事な三角です。

- 1、まず頂点が「わし」座のα、アルタイル。七夕のひこぼしです。
- 2、左下が「こと」座のα、ベガ。七夕のおりひめです。星のよく見える空なら、小さなひし形の全体が見つけられるはず。です。
- 3、右下が「はくちょう」座のα、デネブ。大きな十字(北十字)も、わりと簡単に見つけられると思います。
- 4、デネブ-アルタイル線、アルタイルの右横に、小さなひし形があります。これが「いるか」座です。都会では、必ずしも見つけやすい星座ではありませんが、ファンの多い、愛らしい星座です。ぜひ、おぼえてあげて下さい。



予備知識

- 1、ベガ-デネブ線を底辺にして、パタンと倒したあたりが、北極星。北をさがすめやすのひとつです。
 - 2、デネブ-ベガ線をゆっくり南よりへおろした地平近くに「さそり」座があります。遅い時間にはもう沈んでいるので、来年の夏に思い出して下さい。
- と、いうことで、今回はとにかく「夏の大三角」。夏の星座ですが、秋にはますますきれいです。

わたしが体験したマインドコントロール

和沢秀子

その1、戦時下

尋常小学校が国民学校と改名された年、昭和16年12月8日、日本は米、英を敵として戦うと、大本営発表がありました。大東亜戦争勃発です。わたしは1年生でした。学校の正面の校庭には、紫色の垂れ幕のかかった小さな社のような建て物があって、御真影と呼んでいました。そばを通ったときには必ず立ち止まって、最敬礼をするようにと先生から教わっていました。御真影には天皇陛下のお写真と教育勅語が納めてあるようでした。月初めの朝礼には、校長先生が白い手袋をつけて細長い桐の箱を、うやうやしく持って教壇へ上がって来られました。机の上で紫色の紐を静かにほどき、ソーッと蓋をあけて中から巻物を取り出されるのを、全校千人の生徒たちはじっと見つめていたのだと思います。「朕、おもふに・・・」と校長先生の声が響きわたると、わたしたちはこうべを垂れて勅語を聞き入っていました。意味は

全然解らなくても天皇陛下のお言葉であると言うことが、わたしたち小学生をも緊張させたのでした。新聞の一面には皇室の方々の写真がひんぱんに載っていましたが、幼時期から天皇陛下の存在は知っていました。皇室への憧れも持っていました。

新聞の漫画も、わたしたちの目にとびこんできました。米・英の一番えらい人の頭に角が生えていて、大人たちはその漫画を見て「鬼畜べいはい」と呼んでいました。につつき敵なのだと思います。チャーチル、ルーズベルトの名前は頭にこびりつきました。

敵からわたしたちを守ってくれる兵隊さんは、大きな存在でした。「肩を並べて兄さんと、今日も学校へ行けるのは、兵隊さんのおかげです。お国のためにお国のために戦った、兵隊さんよありがとう。」わたしはこの歌をよく歌いました。

男子が20才になると徴兵検査があって、甲・乙・丙に分けられ必要な時、必要な場所へ送られました。赤紙は戦地へ、白紙は内地で兵役につくのでした。村から兵隊さんが出発する日、氏神様でおはらいを受けて村の人たちに送られ、(村は総出で送りました。)国防色(カーキ色)の軍服にピシッとギョギョと足を捲いた足を揃えて、見送りの人たちに敬礼をして駅へ向いました。わたしたちは手に手に紙の日の丸の旗を持って、田園を横断する列車を待ちました。グワッ、グワッと煙を吐いて走る黒い列車の窓から、兵隊さんは重なるようにして、こぼれそうになって身をのり出していました。わたしたちは日の丸をちぎれるほど振りました。「元気で帰ってきてー、元気で帰ってきてー」兵隊さんたちは帽子を振りながら、遠ざかって行きました。

「勝ち抜くぼくら少国民、天皇陛下の御ために、死ぬと教えた父母の、赤い血潮を受け継いで、みごと突進しますと、神に誓って突進だ。」こんな歌を音楽の時間に教わりました。もの悲しくもあり、痛快でもあり、好きな歌の一つでした。

明治38年5月27日、日本海で歴史上まれな海戦があったと云うことで、その日は海軍記念日になっており、わたしたちの学校は海に近かったせいでしょうか、毎年3年生以上の全生徒は先生を師揮官として、戦争ごっこをやることになっていました。高等科2年生の人たちが隊長になり9人で小隊を組みました。自分の肩より10センチ長い竹を家から持ってきて、鉄砲の代わりにしました。「敵艦みゆとの警報に、わが連合の艦隊は、撃滅せんと天地の、神に誓って根拠地を、乗り出だしたり勇ましく、神に誓って根拠地を。」

学校には2台の大砲がありました。大きな車輪の間に太い筒が斜めに取り付けてありました。戦場

ときめてある松林へ向かって1台づつ大砲を先頭に、南北に分かれて竹の鉄砲をかついで歌をうたいながら歩きました。松林の中では木の枝を背中につけて、腰を曲げたり腹ばいになったりしながら小隊長の命令どおり行動していました。松林を横切る大通りが敵方と出会う地点になっていましたので、「全体とまれ！」という指揮官の号令で、我にかえったように全員止まり、指揮官からの注意を聞いて敵陣へ突っ込む準備を整えたのです。竹の鉄砲は地面において鉢巻をしめなおし、「つっこめ！」の命令とともに「わーっ」と両方から進み寄って、女の子も男の子もまざり合って取っ組み合い、鉢巻を奪ったら勝ちとなりました。わたしは男の子の鉢巻を2本とった記憶があります。「ズドン」と大砲の音がして、火薬の匂いが流れて来て戦争ごっこは終わるのでした。

本当の戦争はだんだん激しくなり、わたしが3年生の終わり頃になっても、続いていました。食べ物はなく学用品もなく、日本列島は爆撃を受けており、都市の学校から田舎の学校へ疎開がはじまりました。

その頃15才以上の青少年から、国は志願兵を募りました。高等科2年生の人が1人、卒業式を終えてから志願しました。飛行機で小学校の上空を何回も旋回して飛び立ってゆきました。特攻隊となったのでしょうか。村に忠霊塔がたちました。子供心に戦争の終わる日が待ち遠しくなりましたが、一方ではけなげにもアメリカ兵が落下傘で降りて来たら、下から竹槍で突いてやろうと、父に竹槍を作って欲しいとせがみました。(父は作ってはくれませんでした)

やっと、長かった戦争が終わって、天皇陛下が村へ来られると云うので、大人も子供も村中総出で、田圃道に座って待ちました。天皇陛下は「御苦労をかけた」と1人1人に頭を下げる様にながら、わたしたちの前をずっと歩いてゆかれました。全国を行脚されたのです。わたしはその時、人間天皇を痛々しく思いました。

兵隊さんに対しても、「犬死だった」と云う人がいますが、どうしてもそうは思えません。職業軍人はともかくとして、一般家庭から徴兵を受けて戦死した人たちは、大きな犠牲者だと思います。犠牲の上に平和憲法が生まれ、その恩恵をわたしたちは受けて生きているのです。戦争で死んだ全ての人を犬死にするかしないかは、いま生きている者たちの責任でもあると、強く思っています。

(わざわひでこ／東京)

ものけん

もの環境研究会

■研究会レポート1

「スウェーデンで育んだものづくり」

講師／Anders Olsson氏(スウェーデン交流センター木工工房インストラクター)

7月29日(土)夜、スウェーデン交流センターにて、参加者／約30人

Anders Olsson 氏の講演会をスウェーデン交流センターで開く 中村昇

7月29日 PM5時、スウェーデン交流センターに、今年4月から木工工房のインストラクターとして勤めるアンデシュ・オールソン氏が、自作の作品紹介をスライドによって、センターの講堂で開催されました。通訳はヘレーナ・ビョルクマンさん。当センターのプロジェクトリーダーとして交流事業に関わっていますが、彼女の流暢な日本語通訳に感銘深く聞き入りました。

アンデシュ氏の作品は大変個性豊かな作品ですが、エキサイティングな形態を表現するために色々な素材を積極的に活用している試みが与える印象でしょうか!木材、石、テキスタイル、毛皮、その他の素材を使って家具を中心とした展開に加えて、時計、動物をモチーフとしたオーナメント、装額への展開を見せています。また、素材の色のコンビネーションに加えて、彩り豊かな彩色を施した色使いにも異彩を放っています。アンデシュ氏の試みは個体の作品作りに止どまらず、インテリアの色々なプロジェクトに参画しています。

スライド映写の後のディスカッションでは文化活動の認識と制度の違いについての議論が沸き、多くの参加者に感銘を与えたことと思います。

アンデシュ氏の作品は、日本のスウェーデン大使館をはじめ、ドイツ、スウェーデンなどのさまざまな公共空間を飾っていると聞きました。

アンデシュ氏はスウェーデン南部のベックシュー市に1952年に生まれ、1977年にクラフトマンの修業をカール・マルムステンのカペラゴールデンで受けています。1979年にアルベスタ市に工房を設立し創作活動に入り、その後1981年から1989年はストックホルム市工芸集団リングヌムで活躍しています。1995年4月来日し、当センターで創作を続けていますが、氏の作品が物語るように東洋のエキスが作品を醸造する大きな要素になっ

ていると思います。1年の滞在の中でさらに多くのエキスを吸収して展開される作品を期待しています。

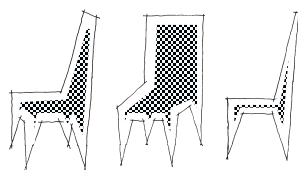
講演会の後、氏の働く工房の一角にテーブルをセッティングして軽食のパーティが開かれました。アンデシュ氏と家族の協力で作っていただいた珍しいオープンサンドを御馳走になり、ビールとワインが乾いた喉にしみておしゃべりを滑らかにしてくれ、心地よい宵を過ごさせて戴きました。

ありがとう

Tack sa mycket ー タック・ソ・ミッケット。

(なかむらのぼる／

Furniture Design Nacka / 札幌)



■研究会リポート 2

連続講座「くらしをきたえる」

ものけんではこれまで割合自由、その場その場でテーマ設定や講師人選をしてきたのだけれど、たまには筋の通った視点で何人かから話が聞けるとよいな、ということで始めたのがこのシリーズ。せっかくだからいつもの2～30人よりスケールアップして、ということで20人あまりの方々に実行委員という形での協力をお願いし、当面3回のプログラムを実行することになりました。それを第1期「ものからの発言」とし、主にプロダクトデザインの近代史を辿ろうということで、まずは1回目、柳宗里氏の登場。超多忙の柳氏に来てもらうことができたのは、柳氏のもとに在籍したことがある、田野雅三氏（旭川東海大）、大萱昭芳氏（札幌市立高専）の協力によります。また会場については、今後2回含め北星学園女子短期大学の好意を、小林令明助教授を通じ得ることができました。今シリーズの記録は、後日冊子にして希望者にお届けしたいと考えます。テープおこし等でどなたかの協力が得られるとうれしい。

ということで、きちんとした記録は後日に。とりあえず、さわりを……。

「私の辿ったデザインの道」

講師／柳宗里氏

8月5日（土）夜、北星学園女子短期大学教室にて、参加者／約130名

柳宗里氏の講演より

「私、デザインのことしかわからないので、デザインの事をお話ししますけど……。

私が今、このようになったいきさつというのは、普通の方と変わっておりまして、私はデザインが専門だけれども、もう一つ重要なのがあって、それは日本民芸館という、民芸に関心のある方から見れば世界的に有名な所がございまして、私はその責任者となっております。それはどういうことかということ、私の父が民芸に熱中しておりまして、そして戦前民芸館を建てたようなわけですが、今かなり若い方とか、デザイナーとか朝晩良く見えます。特に外国の専門の方々もひじょうに多く来られている。どうして民芸が現代において認められ、あるいは夢中になってやれるかということ、いろいろ理由があるんですけども、たとえば世界的に有名な現代デザイン思想の発祥地のリーダーであるところのワルター・グロピウスという先生が戦後まもなく3回くらい民芸館にみえられまして、何をおっしゃったかと言いますと、ここにあるものは非常に貴重なもので、これから新しいものを作り出すのに、日本においては宝物になるであろうから大事にするようにと言いつつ残されたり、あるいはコルビジェという世界的な建築家も来られて、民芸館にあるものをいろいろ見て喜んでおられたわけです。グロピウスもコルビジェも私にとってはとても大事な方でございます。

実は私は民芸館ってのを今やっていて、民芸という言葉は日本では70年くらい前に私の父がいろいろやり始めた頃から言われているわけですけども、今外国へ行ってもなんでもミンゲイ・ミンゲイ、この札幌でも「味の民芸」だとかナントカカントカ……。いずれにせよどこへ行っても通用する言葉になっているわけです。4～5年前にはイギリスとか北欧とかイタリアとかで展示会をいたしました。それから今年から来年にかけてアメリカで大きな展示会を私の所で計画しております。そっちの方もたいへん忙しいんです。本当はデザインが私の主な仕事なんですけども、デザインがなかなかうまくいかない。どういうふうにもうまくいかないかっていうと、いろいろあるんですけども……。

私の父が民芸なんてものをやり始めて、かなり有名で、外国とのやり取りもいろいろある状態だったんですけども、ですから私も小さいときからいろんなものに囲まれてまして、家の中は生れたときから寝るところがない位だったんですね。で、小さいときからこれがいいとかあれがわるいとか、この茶碗がどうだとか、ちょっとひねこけた人間

でございます、あとはみんなに遅れた人間なんですけれども、ものを見ることに関しては他の人以上に鋭敏でございます、そういう若い時代をすごしたんですけれども、年頃になって反抗期になりまして、親のやっていることが何しろ古くさい、カビ臭いと反抗しました。ちょうどその頃、ヨーロッパからアヴァンギャルドという新しい美術が紹介されました。戦時でしたからなかなか外国とのコミュニケーション・情報が入ってまいりませんでした。ピカソとかパウル・クレーとかという人の作品の紹介がありまして、本物はないんですが本などでわかるわけですね。そういう前衛的なものに対して、やはり若いもんですからひかれまして、うちの親のやっていることはカビ臭い、こんなものはぶち壊しちまえなどと反抗したのですね。それに対してアヴァンギャルドってのはたいへん若い血を沸かしたものです。アヴァンギャルドってどんなものか、みなさんご存じかもしれないけれど、そのなかで私がひかれたものは Unconsciousbility= 無意識の美ということです。無意識の美のなかにも Automatism というのがありまして、それに対して非常に興味をもったわけですね。

それから私は上野の美術学校に入りまして、アヴァンギャルドに夢中になりまして、そういうような絵を描いてたわけですが、ある日ちょうど私が3年生位のときに、バウハウスを卒業してこられた水谷さんという方が学校の建築科でもってバウハウスの講演をしておられた。私はそれを聴きに入りまして、そしてバウハウスの理念に非常な感激を受けた。それはどういうことかということ、バウハウスの思想というのは、まずこれからの芸術ってものは社会に、生活に関係していかなくてはならない、これからの美術はそういうところから生れるんだということです。と同時にバウハウスはこれからの時代は新しい技術・Technologyを積極的に用いなくてはならない、というようなことを言い出しているわけです。今までやってきた純粹美術ってのは、ただ自己満足でもって生活に関係ない特殊な人がみているわけでありまして、やはり人間生活に関係あるもの、社会に関係あるものというバウハウスの思想はたいへん私をびっくりさせまして、すぐさまそれまでのことに縁を切ってバウハウスのデザインの方にはいろいろとしました。ちょうどその頃コルビジェの本が入ってきました。コルビジェのお弟子さんで坂倉準三さんという方が日本に帰ってこられまして、彼がおしえてくれた「今日の装飾芸術」というコルビジェの本があるのですが、これを読んで非常に感激したんですけれど、それはどういうことかという

と、装飾のない所に本当の現代の装飾はある、と端的に言えば書いてあるんですね。たいへんびっくりしましてコルビジェに興味を持ったわけです。ただコルビジェの紹介はバウハウスよりもっと遅れて日本に入ってきました、図書館に通ってコルビジェの本を探すんですがなかなか、そのうち「輝ける都市」という本が入ってきました。それは現代の建築、都市計画、地球の有機的な組織、そういうものが絵が描いてあって説明してあるわけなんです、ここでも私びっくりしまして、どうしてもフランス語をやらなくちゃならないと思、フランス語の勉強を一生懸命やって、わけもわからず読んだんですけれども、コルビジェの本っていうのは、ちゃんと文章が書いてあるんですけれど、非常に詩みたいでよくわからない。でも抑揚の激しさは僕の性格に良く合っていました、なんだかわからないけれども非常に魅力的でした。ちょうど日本のそのころは戦争のときですからお金がないんですね。外貨がなくてしょうがないから日本政府が外国から有名な建築家とかデザイナーを呼んで、日本の輸出工芸に力をいれなくちゃいけないっていうので、誰かいなかったら、私その係の人をたまたま良く知っていて相談を受けまして、私は若気のいたり、じゃコルビジェ呼べって言ったんですね。ところがコルビジェはそのころは世界的に有名な方ですから国賓待遇としてしか来ない。そんなお金は日本にはないんで、それじゃどうしたら良いかということで、コルビジェの所に長くおられた方に相談をしたら、コルビジェの所にペリアンって女のの人がいるから、それ呼べってわけですね。

ペリアンはコルビジェの協力者としては最高の人だということは当時よく知られていて、結局フランスから呼ぶことができるわけです。戦争最中ですからどうやって来るんだか、飛行機はとってもダメで、船で来たわけです。それで途中でもってパリは陥落して、そのときは涙をながしたそうなんですけれど、無事日本に着きました。そして僕がフランス語を勉強してたもんだから、ペリアンの係になりまして、約2年間かな。まず、ペリアンは日本のものを勉強しなくちゃいけない、日本のことを知るためには日本中をまわらなくちゃいけないっていうので、北は青森から南は鹿児島まで私がついてまわったわけです。(後略)

連続講座「くらしをきたえる」

第1期「ものからの発言」
 リビングデザインの近代史／証言による「もの」
 が来た道、「くらし」の未来
 第2回 講師／島崎信氏
 『私が見たスガジ北ア・デザインの黄金時代・デザイン
 とその背景』

島崎信（しまざきまこと）氏
 1932年、東京生れ。
 1956年、東京芸大美術学部工芸科図案部卒
 1959年、デンマーク王立芸大建築科終了
 1960年、デンマーク市・インスティテュート・オブ・テクノロジー終了。現在、武蔵野美術大学教授（工芸工業デザイン学科インテリアデザイン研究室）、日本インテリア学会副会長、北欧建築デザイン協会副会長。国内外で、駅舎・ホテル・商業空間・住宅などのインテリアデザインやインテリア関連プロダクト商品のデザイン、企画開発、コンサルティングに関わるほか海外の美術大学からの招聘で、インテリアデザインについての教鞭をとる。世界各国を旅した際に自身が撮影した写真をもとに、1988年以來毎年写真展を開催してる。主な著書：「フォトエッセイ・世界のインテリア」（トーソー出版）、「ライティングデザイン辞典」（産業調査会）、「キッチンブック」「ハウスブック」（ともに監修、三洋出版貿易）「椅子の物語・名作を考える（日本放送出版会）など。

9月22日（金）

5：30 開場・6：00 開始

会場／北星学園女子短期大学

札幌市中央区南4条西17丁目 Tel.011-561-7156

主催／連続講座実行委員会

運営事務局／もの環境研究会

参加方法（1か2の方法です。）

- 1、実行委員からチケットを買う。
- 2、下記事務局へ [氏名・住所・Tel.&Fax・所属] を明記したものを郵送するか Fax. し参加登録してください。折り返しチケットをお送りします。（代金当日精算）定員100人。先着順です。

■もの環境研究会事務局

高橋三太郎／家具工房 SANTARO

〒002 札幌市北区拓北6-2-5-23

Fax：011-773-6676

私は一部で「癒しの御用聞き」などと名乗って、まあ気功やら、いろんな民間療法や伝統医療がありますよ、なんてことを尋ねられたら紹介しているのだけれど、ここのところ世の中でも「癒し」というのが流行っていて、「美術手帖」の8月号のテーマまで「癒し／祈り」になっている。美術界というかアート界の人たちがどれだけ「癒し」とか「祈り」を理解しているかというと、ほとんどはわかってないんじゃないかって思うけど、（黒づくめのファッションは宗教団体っぽいですけどね）その「美術手帖」で紹介されているフィリピンのロベルト・ヴィラヌエヴァという人はかなりの霊能者で、その作品は自らの民族、ルソン島北部の山岳民族、イゴロット族の伝統に根ざした祈りに満ちたものだった。美術界だけでなく、世界各地の環境保護団体からの招きも多かった事からも彼の作品が単なるアートにとどまらなかった事は伺えるのだが（立川で街の中にアート作品を沢山設置したゾーンがあるのだが、そこに出品された彼の作品は大きな男根を抱えた道祖神の様なものだったために、伝統的宗教観を失った近代日本の良識派一般市民によって何度も壊されたそうだが）、彼の作品を過去形で書いたのは、実は彼はこの2月に亡くなってしまったからなのだ。彼とは今年の11月に札幌で出会ったのだが、そ



の時すでに白血病で体調は良くなかった。彼はオーストラリアでのインスタレーションの時に倒れ、死を宣告されたのだが鍼治療によって命を長らえることが出来たため、それからは大地に鍼を打ち、地球を癒すと言う作品を製作してきた。彼がわが家にホームステイした時に気功をしていたことなどからいろいろ話が弾み、すっかり気があってしまい、被爆50周年の8月6日に広島で鍼を打ちたいと思っていて、その時には音楽などで手伝っ

て欲しいということになった。そしてそれ以降妻のみかみめぐるが彼の滞日中の心の支えとなり、彼女が東京で彼に気功家で風水研究家の出口（いでぐち）衆太郎氏や音楽家の細野晴臣などと引き合わせることになる。しかし、彼がまだ生きている頃からスタートしたこのプロジェクトも、できるだけちゃんとした儀式をやりたい我々と、イベントとして考えるアート関係者との認識のズレが大きく、ロベルトが亡くなって以降、儀式の方の話は宙ぶらりんのままだった。

そんな中で、彼の親友であり、札幌にも一緒に来た映像作家のキドラット・タヒミックが彼の意志をついで広島に来ることになり、ロベルトの希望通り、風水、気功、音楽という要素を元にした「鍼に気を入れる儀式」を行うことになった。7月の末の事である。ドタバタした中で儀式グループは完全自腹切り状態で準備に入り、当日を迎える。このあたりについては、みかみめぐるがこれから出る雑誌「気の森」（BABジャパン）や「賢治の学校」に書いているので興味ある方はそちらを読んで頂きたい。

広島中央公園の一角に出口氏が風水の面から計算した角度、位置に長さ7.6メートル、太さ約15センチで中が空洞になり大地の音を聞く穴が開いている鉄の鍼三本が立てられ、結界がきづかれた。なにしろ場所がかつてアジア侵略の拠点であった大本営があった場所で、そこにフィリピン人が鍼を打とうと言うのであるから事は一大事。慎重に慎重を重ねた。そして8月6日は午前4時頃から、地元の神々への祈り、出口氏による東西南北と天地の六方への拝礼と気舞いの奉納、キドラットをはじめとするイゴロット族の一行（去年村で見つかった米軍の不発弾を切って作り、教会につけようとしている重さ108キログラムの鐘を担いでやってきた）による祈りと踊り、気功による天、地、人の気の交流、細野氏指揮による音霊の奉納、今回長老としてお迎えした日本の精神医学界の重鎮、加藤清先生による「言霊—全てのものへの語りかけ」と進み、原爆投下時刻の黙祷で現地での儀式を終えて、広島への聖地、宮島の彌山へ登って再び祈り、肩の荷を下ろした。

で、儀式をやってみて、晴れた空から涙のような雨がポツリと落ちたりというような、祈りが通じたと思える出来事もいくつかあって苦勞した甲斐があったのだが、我々はもっと地球への祈り、神々への語りかけなどを本気でやらなければならないと強く感じた。広島などにおいても死者への慰霊は大切だし、戦争加害者としての反省も必要だが人間同士で事を済ませる段階ではなくて、もっと意識を上げ、傷つけた大地、汚した地球、そこに

宿る神々との関係の修復も人類全体で計っていかなくてはならないだろう。人類は意識を変えることで生まれ変わることが出来る。確かに現実の危機は切迫しているが、これをハルマゲドンとしてカルト宗教に利用されることはないのだ。死ななくても生まれ変わることが出来るのだから。

10月には神戸で横尾忠則氏と細野氏のふたりを中心とした「神戸を癒す」個展とコンサートがある。ここにも祈りの場を作るためにまた手伝いを始めた。

核の火に焼き尽くされ
核の灰と成り果てて
人類は既に滅びたり
されとこの三位の柱は
聖域に打たれた金の依り代
生けるものを大地に結ぶ
天地冥界一体の神の印
大地の底よりの癒しの力
滅んだ人類の復活転生を願ひ
無明なる国家民族の自愛を離れ
今此擲で傷ついた地球の再生を誓う
この鐘の音に人々の気を合わせ
人類の癒しを深く神に祈る
広島に平和を
広島を通じて世界に平和と平安を与え給え

加藤清

（みかみとしみ／MICA BOX／札幌）

9 / 27 (水)、28 (木)

名古屋オペラ協会

オペラ 海の子守唄 (全2幕)

原作：J.M. シング / 台本：山崎愛子

作曲：林谷英治 / 演出：池山奈都子

P.M.5:45 会場 P.M.6:30 開演

名古屋芸術創造センター ¥5000 (全自由席)

チケット・ピア (052-320-9999)、各プレイガイド
問い合わせ：052-876-3590 (福田)

10 / 15 (日)

山崎あいこ 秋のヒーリングワークショップ

5時半開場、6時～9時、9時～9時半ティータイム

京王プラザホテル (新宿西口) 南館 10階

会費：10000円

申込先：0463-76-8073 山崎

現代版 チセ・ア・カラ 永田まさゆき

・・・ご縁があって二風谷で家をつくるお手伝いをする
ことになった。建て主は貝澤耕一さん夫妻。1992年に
亡くなった貝澤正さんの子息である。新築するのはまっ
たく今日の方式によるが、アイヌ式地鎮祭をするという
ので、ぜひと列席させてもらった。予定建物中央の地面
に祭壇をこしらえ、火をもやし、それをはさんで関係者
が向かい合わせにべたんと座り、祈った。

良くわからないところもあるのだけれど、ヒトが大地に、
他の生き物と共に（様々な関係をつくりながら）生活し
ていこうとするときに必要だと思われる、謙虚で誠実な
姿勢をそこに強く感じた。

以下は、当日祭主をつとめた萱野茂さんが、神々へ伝え
た祝詞である。

貝澤耕一宅のチセコツエイノンノイタツ

(地神祭)

1995年8月26日 萱野茂

イレスカムイ
モシリコルチ
チランケピト
クチオコロカムイ
オリパクトラ
ネオネコロカ
アパセケツトム
チコイモソソ
クキシリネナ
トキタサ
パスイタサ
チコナンキルワ
ウンコレヤン
ネプクネワ
ソモネヤッカ
チノサラマ
アイネカラカラ
タパンペネノ
チコトキアニア
タパンしげる
クネルウェネ

エエパキタ
タナントヨッタ
ピリカノト
チコイヌメケカラ
チエカラカラワ
タパンペネノ
アシリチセコツ
チェイノンノイタツ
ホシキアンチセ
アイワケテワ
ネオカケタ
ペレケル
タパン耕一
ヤイクルカタ

火の神さま
国土を司る神
天から降ろされた神
仮に安置された神
遠慮と共にでは
ありますが
あなたの心を
目覚めさせることを
私はするのです。
杯の方へ
奉酒箸の方へ
お顔をお向け
下さいませ
何者でもない
私ではあるけれど
この地神祭を
任せられまして
このようにして
杯を手を持つ
かやのしげるで
ございます

次に言いたいのは
今日この日に
美しい日を
きれいな風の日
お恵下され
このように新しい家
建てるための
清めの儀式
以前にあった家は
神の国へ帰った後
その跡へ
若い人である
耕一が
自分の力で

アシリチセ
アシルスイ
セコロネワタ
エカテケトツ
アコイランケ
トサツイナウ
コエトレンノ
スツテケトツ
テケトツカシ
アコイランケ
ハルピリカ
トノトトラ
アテッサムカシ
チコイトムテ
ネワネヤクネ
イレスカムイ
シヨロワノ
オヤオヤカムイ
キキリネヤッカ
チハルコレ
カムイモシルン
シキリパクニ
チコイタツカラワ
ウンコレヤン

アイヌイタツセコロ
アイヤッカ
テエタクルネノ
クイエニタンペ
ソモネヤッカ
テエタプリ
アイヌプリ
ウネロックス
ケウトカンケ
ネルウエタパンナ
チャイコルシカワ
ウンコレヤン

アアシチセオッタ
スクアクルウタ
アンヤッカ
イユニンサツノ
ニューチリサツノ
オカエアシカイクニ
チコプンキネワ
ウンコレヤン

イタツトツケツタ
ネプキルウタ
ウタラオピッタ
アムピリパノカ
イユニンサツノ
ピリカチセ
アアシオケレクニ
カムイプンキ
アネクニタ
コヨイチパチパ
ネルウエタパンナ
コンカミナー

新しい家を
建てるために
今日このように
先祖のおじいさん
その手元へ降ろされた
手垢の付かない美しいイナウ
それと一緒に
先祖のおばあさん
その手元へ
降ろされた
立派な穀物
お神酒も合わせて
あなたの御前に
供えました
これらの供物を
あなたの方から
あなたの手で
諸々の神へ
虫の果てまで
分け与えられ
神の国へ
それらをみやげに
神の国へ帰ること
言い渡して欲しいのです

アイヌ語と
言いましても
昔の人のように
上手に言えるもの
ではないけれど
昔の風習
アイヌの生き方
こうであったので
それを束ねて私は
もの言うので
私共の願いを
お聞き下さい

新しい家で
若者達が
暮らしても
いやなこと何一つ無く
無病息災で
暮らせるように
ご守護あらんことを
心から念じます

言葉のおしまいに
働く人々
一人ひとり
爪傷ほどの
怪我も無く
立派な建物が
建て終るように
火の神のご守護が
ありますように
心から期待と
お願いを申し上げ
私は礼拝をするものです



やまのディスコ IRISH NIGHT

EALU (CIARAN & EOIN FROM IRELAND)

HARD TO FIND(FROM SAPPORO)

and...YOU !

10カ月ぶりのキーランとオーエン、またまた HARD TO FIND の一味、加えてチャランゴ・ケーナ・サンポーニャの松井さんとその仲間、そしてそしてあなた！

9月10日(日) 開場 17:00 開演 18:00

小別沢トンネル

永田宅 AT Mr. & Mrs NAGATA'S

●来られる方は事前に連絡願います。

Please give us a call or fax to book.

永田 NAGATA

phone 011-664-5148, fax. 011-664-6144

内山 UCHIYAMA

phone & fax. 01238-7-3929

●飲み物+一皿、楽器をお持ちください。

Bring your own booze+food+instrument.

●たき火あり、テント・寝袋持ち込み可

Campfire, Tent, Sleeping Bag etc. OK

●参加費 ¥500 (投げ銭歓迎)

Charge ¥500

10 / 1 (日) ~ 7 (土)

素材の気持ち・展

鴨下蓉子 (金属)・永田まさゆき (木)

松原成樹 (陶)・山本良鷹 (石)

ギャラリーたびお

札幌市中央区北2西2道特会館2F ☎ 011-241-6301

11:00 ~ 18:30

10/1 (日)、18:30 ~ オープニングへどうぞ

編集後記

永田まさゆき

■ちっとも暑くならなかった、ここ日本ではない北海道でした。

私の日本の夏体験は、8月のふるさと=たまごの会八郷農場(茨城県)でのワークショップ3日間。ベンチ制作の協力で削った脚が50本余り。おまけは古くなった事務所の建て替え作業。フィンランド製・角ログのキット(写真)。床の寸法で2.4×4.1m(約6帖)、厚さ4cmのパインのむく材が結構しっかり組上がる。ちょっとオジサンにはハズカシイ破風(はふ~屋根の妻部分)かざりがアクセント。4~5人で丸一日かかりほぼ完成。炎天下、皆脳細胞を少しやられたかも。祝落成のビールに感激。ついでにちょっとした事件も発生。話の勢いで、夜陰に乗じて常磐道をすっとぼし、寝静まった東京の自宅からスペイン土産のおおきな生ハムのかたまりをさらってきたオジサン怪盗が出現。しっかりニワカ大工の胃袋に収まった次第。うまかった。ところでそのキットの値段、ないしよだけど、さるルートで約60万円。家なんか一生かけて作るもんかなとおもえてしまう。土地さえあれば(所有しなくても)家族にキット1個ずつ、たとえば4人で4個、食堂とバスルーム用に2個、プラスαに1個、合計7個しめて420万円。設備は別なので同額つきこんでも800万円。基礎を丈夫にしたり断熱したり、かかっても合計1,000万円ってとこか。

■でも欲張って、もっと安く住みたい。間口9m高さ4m余りの断面のビニールハウスが出回っている。長さ36m、つまり100坪で150万円位で入手可能とのこと。この中に仮設用足場パイプと段ボールで必要な数の箱を必要な位置・高さに作り住むのだ。神戸、いや新宿地下道の住人諸君と連帯!

おおきな雨風をしのぐビニールシェルターと断熱に優れた段ボールの組み合わせは立派にエコロジカルな住まいといえる。願わくばビニールに代わる環境にやさしい「幕」素材の開発を。まあ、でもそれを待つ事なく、カッターナイフとボンドで住むところを作ろう。食卓のわきにトマト畑、中空のベッドの下に山羊の寝床。火の始末が課題かも。薪ストーブの上のじゃがいもをほおぼりながら、「家」からとおく離れ、世界と交信しよう。

